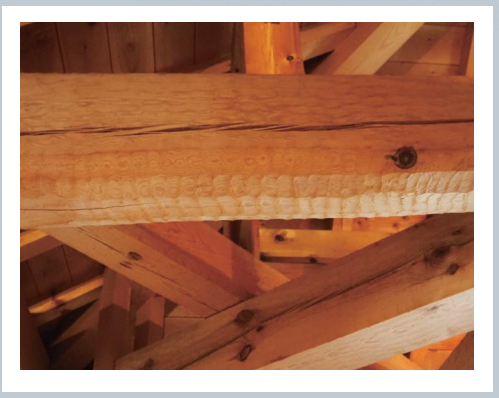
チョウナ（手斧）仕上げ

小峰城清水門復元工事
かわら版第3号



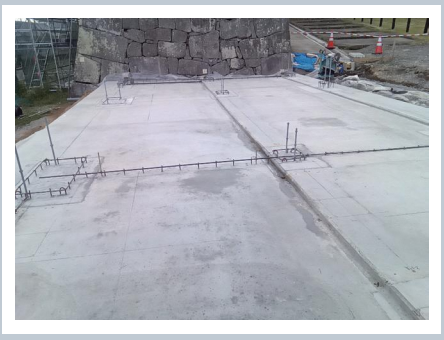
前御門でみられる粗いチョウナ仕上げ

～木材を伝統のチョウナで仕上げる～

柱と柱を渡す太い梁は丸太から加工されます。清水門の丸太は、伝統的な「チョウナ」（手斧）の道具を使って、仕上げを行っています。チョウナは斧の一種で、木を削った粗い痕をそのまま残す仕上げの方法です。迅速な加工が求められた城郭建築では、丁寧なカンナ削りよりも、チョウナ仕上げが多用されていたと考えられます。平成6 年に復元された前御門でも、このチョウナ仕上げが用いられました。

～古い礎石を保存する工夫～

復元工事の重要な資料となったのが昔の礎石（柱の脚元に据えられた石）です。その貴重な礎石を保存するため、今回の復元工事では、本来の礎石の上に盛土をして、その上にさらに新しい礎石を据えて、柱を立てる手順をとっています。文化財である遺構（昔の建物跡）を守りながら、新たな復元を両立させる工夫です。



本来の礎石を保存して、その上から基壇を覆う

「小峰城清水門復元工事かわら版 第３号」2025 年 7 月発行　※本紙は白河市と連携し、東北工業大学 建築史研究室が制作しています。
〔工事・工程の問合せ〕白河市建設部文化財課 史跡整備係　tel 0248-22-1111（代）内線 2230
〔本紙に関する問合せ〕東北工業大学 建築学部 建築史研究室（中村研）tel 022-305-3611